

根源的生命倫理の存在論的時間論

臼杵 靖剛 (Seigo Usuki)

北海道大学

本発表の目的は、根源的生命倫理の概念を生命科学との関係で存在論的に明確にして、さらにその概念を現在を生きる人間の時間に存在論的な視座で具現化させることである。以下にその目的に沿った概要を記す。

道徳と倫理をあえて区別するならば、道徳は個人の、倫理は社会の価値観や行動基準となる。社会的ルールは歴史的に変化しているので倫理観も当然変化してきたが、特に目覚ましい発展を遂げた科学技術の背景での倫理観が生命倫理と呼ばれる。そこでは生命科学は生命倫理の検討に必要な欠くべからざる基礎となっている。

ところで、第二次大戦後の国際軍事裁判の一環で行われた医師裁判の結果生まれたニュルンベルグ綱領が現在の生命倫理が扱うヒューマンイズムの観点での諸問題の端緒となっている。本論ではそれらの取り組みとは区別する意味で生命倫理の根源となる倫理をメタ倫理学で扱うということで根源的生命倫理という造語を用いることとする。

根源的生命倫理は道徳的・倫理的価値と原理が個人的好みや文化的主観の表象ではなく、信念に基づいた善悪が心や文化から独立した客観的特徴として存在しているかどうかを問うメタ存在論でもある。一方、自然科学の生物学は生物全般を対象にしている。生命科学は生物の生命現象を究極的には分子レベルで解明することであり、特に細胞と遺伝子を対象にしており、医学・理学・薬学・工学・農学など幅広い分野に及んでいる。

生物学はアリストテレスの自然学・動物誌が起源であり、自然学による動物についての観察や現象の解釈が自然や数学と同じように議論されており、生物学も生命科学もアリストテレスの自然学に基づくと言える。つまり、生命科学もすでにアリストテレスの自然学の哲学的存在論の構造で成り立っている。そこで、根源的生命倫理を検討するには存在論を概観する必要があるが、その前に少し道徳性を存在論的に概観してみる。

道徳性の客観的特徴の有無に関して道徳実在論、道徳相対主義、虚無主義の見方があるが、ソクラテス、プラトンの教えを継承したアリストテレスのニコマス倫理学は「人間はより良く生きなければならない」をメタ倫理の大前提にしている。次に、何に注目して正しさを評価するかという規範倫理では個人の性格（徳倫理）、行為（義務倫理）、結果（幸福倫理）の観点があるが、アリストテレスは幸福を最高善としている。さらに、幸福倫理を規範として個人によって異なる幸福感を生活の視点から快楽的・社会的・観想的の3つに分類して、3つの善（道徳的善・有用的善・快楽的善）の目的手段の連鎖の究極目的に幸福を位置づけている。ここでの善の多義性はトマスアキナスが指摘する善悪の表裏関係に繋がり、カントが悪の根源（自己愛）に対立する道徳律を道徳的善とすることでその克服を試みた。その結果に基づいて現在の倫理学は成り立っている。

自然科学との対比でアリストテレスの存在論の自然主義を強調すると自然主義的誤謬に陥る。自然科学が哲学から分岐発展できたのは自然科学に「存在から当為が導かれる」という自然主義が持ち込まれるのを実験を重視したことで排除できたからである。

アリストテレス存在論を現代哲学において継承した前期のハイデガーは現存在の分析に日常性世界からの形而上学的飛躍をしていない、さらに後期のハイデガーは「哲学の思索は詩作である」と言明しているから自然主義的誤謬の余地はなく自然科学と齟齬

なく存在論を展開している。アリストテレスの存在論哲学以来、現代にいたるまで存在論における存在忘却が起きたとハイデガーは主張して存在の意味を問う（存在者と存在の存在論的差異を問う）哲学を始めた。存在の意味を問うとは同時に「君たちはどう生きるか」という問いかけでもあり倫理の問いでもある。存在から当為が導かれるという自然主義的問いのように思われるかもしれないが、「哲学の思索は詩作である」という理念的認識であればハイデガーの存在の問いは本質存在の問いとしては問題はない。

存在論の基本構造は実証的な事実存在（○○○がある）と思弁的な本質存在（○○○である）から成り立つ。生命科学に限らず自然科学は存在論としては科学的实在論と言う立場をとり、方法論としては仮説演繹法であり、事実存在から帰納法的に仮説を立て演繹的に結論を予測し、実験により仮説の真偽を確かめ、仮説が真であれば新しい事実存在として更新される。こうして取り敢えず誤りのない仮説により成り立つ世界は私たちが日々生活する日常性世界と呼ばれる。正確には日常性世界は素朴实在論であり、科学的实在論は数ある实在論の中では素朴实在論に一番近い立場である。事実存在に向き合う自然科学者は現存在としては世人自己（ダスマン：悪い意味ではなく）であるべきであるが、根源的生命倫理は本質存在であるから、現存在の各私性、主観が関与する余地がある。ただしカントの警告する超越論的独断論は注意深く避けねばならない。

現存在は世界の超越論的な存在者であるが「身体」をもって経験の現場に居合わせて「環境」と相互作用している。身体をメルロポンティは現象学的身体論で考察しているが、本論では生命とつながる身体生命現象存在論により時間を手掛かりに生命に迫る。

現代の人間に限らず生きている人間の時間を存在論的にみると時空は認識の感性形式である。時間は外的感性形式である空間より理解が困難に見える。ここではアリストテレスの「時間とは前後の運動の数である」という定義を参考に進める。近年の物理学や神経科学の時間を空間化して解明する手法、さらに AI の深層・機械学習によるデータの次元削減も空間化手法であり時間の空間化は有効であると考えられる。

時間にはアウグスティヌスの言う分散せず存在する「過去・現在・未来」という心の時間もあるが、将来には時空間の空間化により解明されていくと考えられる。生命科学の時間には概日時間、時間遺伝子などの時間生物学、生成 AI が作り出す細胞分化の疑似時間などがあり、これらの時間は概日計時的であり、運動する身体の主観的時間意識は展望計時的である。そこで運動する身体に着目して展望的時間から時間を検討する。

19世紀末に動く映像（日本では活動写真）が広まり、その後は映画として静止画にない動く映像により感情表現が移入されるようになった。さらに発展を遂げた映像分析と生成 AI 技術は今日では日常性世界の行動理解の手法にもなっている。ここでは脳・神経科学に依らない映像分析により主観的時間感覚を検討した。その結果、人間の固有の環世界時間と映像速度の分析により主観意識と動きから生じる時間位相差の補正に記憶の形成（過去）と展望予測の形成（未来）にともに錯覚によって生じた遮蔽/補完効果の深い依存関与が認められ、感性としてのアイデア感においてその効果が示唆された。

最後に、現存在は非本来性と時間性のどの脱自態においても虚無性と根拠欠如態であり、動く映像でも各瞬間（1/18 秒）は無である。しかし、無である現存在に対して根源的生命倫理の志向性は感性による感覚質感が人工質感として特徴づけられる。これはある種のアイデア感であり、真善美の三大アイデアの真美2つが支える善のアイデアへ向かう根源的生命倫理感の志向性として現出され得ることが推論される。

【主要文献】1)ハイデガー, M. 著、原佑訳・渡邊二郎訳(2012). 存在と時間 第6版 中公クラシック. : 2)ブオノマーノ, D. 著、村山郁也訳(2018). 脳と時間: 神経科学と物理学で解き明かす[時間]の謎 森北出版.